

社会経済史の一視点

大家重信

経済史の重要性を最初にとめてその研究の必要を唱道したのは18世紀後半の啓蒙思想家であり、彼等は「理性」をもってすべての人間の中に見出しうると信じ、その結果普遍的な「人間性」を強調した。従って自然史は人類史の研究に必要欠くべからざる前階程であると考え、また世界史あるいは普遍史こそ歴史家の固有な研究領域であると考えた。これは今日で云えば一般文化史のことであるが、こうした一般文化史の傾向はすべての時代、すべての場所における社会的存在としての人間を、統一的な発展としてつかもうとした啓蒙思想の産物である。特にフランスのヴォルテール（1694～1778）はその代表者であり、彼は経済史の問題を原理的に提出したのである。（注1）経済史はJ. H. クラパム（1929）も言う如く、歴史学と経済学との境界に沿って存在する境界線上の地帯の研究としてともにそこでのいわば放牧権を要求する境界のはっきりしない領域をもっているのだが、（注2）それが学問として成立したのは19世紀最後の20年代と見てよい。

さて現代では自然科学の圧倒的な発展の前に「われわれ人間の精神はそれ自身の創造物の前に途方に暮れ且つ魅惑されて佇んでいる。」（注3）いわゆる転換期ともいわれる変動の激しい時代であり、こうした時代であればこそ、近代経済学の理論の精緻化乃至はその記号化、数量化を通しての合理的、客観的分析よりも、かつての文明の歴史における大きな変化のあった時代、大きな危機をめぐりぬけて来た転換期と精神的動揺の時代に眼を注ぎ研究することが特に必要である。次にわれわれはいかなる経済学上の立場をとるにしても、A. J. トインビーのいわゆる「歴史家の楽園ともいべき動乱時代」に、あるいはこうした転換期に生れ合わせた以上は、この危機における人間の自己省察——物質的生産において結びあっている生きた諸個人の徹底的把握は特に経済学を研究するものに与えられた責務である。

さて経済史学の性格の問題について、それが経済学に属するとか或いは歴史学に属するとかの論議は、従来しばしばたかはずかされたところであり、今日ではそれは二者択一の問題ではなくして両者同時の問題であり、経済史の史料の蒐集及び解釈については歴史家としての教養が必要であり、又一方では経済的な変動・傾向・可能性についてできるだけ明白な表象をもっていなければならない、例えばある経済の発展段階においては労働者の借金は将来の所得を担保にしての雇用主からのそれであり、今日のそれは雇用主に負うのではなく、工場外の代理人——金貸・質屋・就中あらゆる月賦販売会社——に負っている、というような傾向はどこでどのようにして生じたのか、というような経済学的な教養も経済史の研究には欠くことの出来ない条件である。ところで経済史が社会科学の一部門であるとすれば、それは人間の営みを対象とするものであることは政治、法律、宗教その他の一般社会科学、あるいはもっと包括的に言えば芸術その他も含めて文化的創造物一般と同じく個性的な性質をもったものであり、それは全的な生の作り出すものであって、ディルタイの言う如く理性を中核としながらも、単なる理性そのものではなく、感性や心情や意志を兼ね備えつつ自然的資質としての肉体に宿り、それが自然的乃至人間的環境と交渉しつつ、一つの行動主体として積み重ねて行く体験、それを一つの統一的な行動主体として把握し、その体験の表現されたものを、同じく統一的主体としての共通

の人間性に結ばれたわれわれが理解するところに文化諸科学の成立を認めることが出来るのであり、この立場に立つときそれは 個性的な世界であるということが理解出来る。(注4) こうした人間の営みを、個性的な人間の行動やその成果を、認識対象として自然科学と同じように科学の名に値する因果律を適用出来るような科学的認識はどうして成立しうるであろうか。この問題も既に論議し尽されて居り、ここに事新らしく持ち出すほどのこともないと思うが、唯一一般的には自然科学と社会科学との方法論的独自性を主張する見解の方が有力であることを指摘するだけにとどめておく。ここに駄足ながら人間の営みである社会現象は非合理的なものを含んで居り、従ってそれは本来的には計測不可能性が付着している例としてラードブルッフの敘述を引用しよう。「ナイル河の上流に風光明媚なフィレーという島がある。その島には古代の遺物である芸術的価値の大なる名刹がある。所で此の名刹が附近の農民のための灌漑用の設備に犠牲にせられるような事件が到来した。この事件は識者の間に論戦を惹起した。サー・ジョージ・パートウッドはこのことを甚だ遺憾として攻撃した。ところがサー・ヘンリー・ノリースは「若し貴下が燃焼しつつある家に生ける嬰兒とラファエルのドレスデン・マドンナと共に唯独り居りたりとせば、如何にせられるであろうか」とサー・ジョージに逆襲した。ところがサー・ジョージは公開状を以て、自分はドレスデン・マドンナの方を救い出す旨の答弁をした」という物語りである。(注5)

ところで経済史はその発達の背景にはイギリスにおけるチャーティスト運動(1838~53)フランスの2月革命(1848)ならびにパリ・コンミュンの暴動(1871)等があり、社会の変動をまのあたりに見て経済学の研究者たちがとくに経済的要因のもつ実践的重要性を意識し、ついで多くのひとびとが社会的勢力の発展、とくに経済史的発展に興味をいだくようになった。当初法制史的な衣服をまとっていた経済史はこうした社会的背景に影響されて19世紀の経過中に次第に完成され、ひとつの独立した個別科学としての地位をみとめられるようになった。今日それからほぼ一世紀を経過して西欧を中心とした社会経済体制が大きく揺らぎつつあるとき新しい視点に立って社会経済史を反省して見る必要があるのではないか。

今新しいパラダイムを求めて社会経済史の研究 방법에新しい変革の動きがあらわれて来ている。それはハンガリーの経済学者カール・ポランニーであり、その著書に「経済の文明史」がある。彼は文化人類学的な接近方法を用いて、市場経済というのは、人類史における特殊な時代の制度的所産なのであり、その意味では、原始的な経済をむしろ近代経済とまったく同等の次元で考察するよう提案している。そして非西欧社会の経済現象をとりあげて文化人類学的な経済研究を行っている。われわれも今新しい視点に立っていわば比較文明論の立場から社会経済を眺める必要があるのではないか。

さて長い人類の歴史においてその発展の跡を辿れば大ざっぱに言って「野蛮」ないし未開の段階と「文明」の段階に分けられる。この両者の区別をどこにおくかは種々問題があるが「人間が文字を用いるようになり、それを用いた記録が残されるに至ったこと」をその区別の基準にすることが行われている。更にその内容としては①文明はその内的構造においては常に知識の量的な拡大であって、その都度における異質物の創造ではない。②文明は常に進歩の過程であって一度獲得されたものは次のものの基礎となるからそこでは本質的な退歩はない。また脈絡のない飛躍というものもない。③文明は普遍人間的なものであって、それ故に個人の、地域の、また民族や国家の特殊性というものは存しない。勿論文明はある地域やある民族が他の地域や他の民族にさきがけて創造することはある。それはたやすく他の地域や民族に移し植

えられる。文明の発生や伝播に民族や地域によって差があるのは、ただ民族や地域が文明に参加することの遅速があるだけである。④以上のような意味において文明に関してはただ一つの人類の歴史、世界の歴史があるだけである。この文明を作る精神作用は理性による認識と合理化の行為なのである。シュペングラーにしてもトインビーにしても世界史の構成単位としての文明は円環コースを描くものとして、そして世界史全体としてはそういう円環の循環としてとらえられている。(注6)次に文明の発達段階を示す事実として「国家の発生」があげられる。国家が成立したということはそれだけ人間の社会生活が複雑となって、ひとびとの公共生活を規制する権威の存在が必要になりここに「政治」というものが生まれたことを意味する。国家が存在すればそこには「支配者と被支配者」の存在を認めなければならないし、従って国家の成立は階級の発生を意味する。国家の成立は人類進歩の一過程であり、その以前の社会は東洋でも西洋でも(勿論その成立には年代のずれはあるにしても)平和な豊かな社会ばかりがあったわけではなく、人間集団相互の間においても争いの絶えなかった動揺と不安の世界であったに違いない。国家の成立は多くのひとびとを被支配階級の立場においたが、とも角それによって、人類は全体として自然の支配力に対抗する有力な機関を形作り、以前よりもはるかに進んだ産業や芸術(技術を含む)を作り出すことが出来たのである。それ故に一般に文明と呼ばれる社会は大体において国家の成立と共に始まっているのが歴史上の事実である。

けれどもひとくちに国家といっても世界最初の国家〔ナイル河畔のパピロニアの国家〕は今日の国家とは性質の異ったもので近代国家の特徴はそれが民族というものとの深い関係をもっているということである。(注7)

経済史とは一客観的意味における経済史—経済生活を歴史の観照の対象として意識的にとりあげ、それが非経済的な現象とどのような関係をもつかを研究し、その内的関連を歴史的因果関係に結びつけて発生的に理解しようとするものである、というように一応定義しておく。経済史もまた歴史の一部門であるとすればその基礎となるものが社会の経済関係であるとしても歴史自身が時と所によって変動発展するところの社会的歴史的事実である以上その発展過程の連鎖はいくつもの個別環に分解される筈である。そしてこれらの環の一つ一つが別々に分析し、説明される必要があり、説明の様式が連鎖の環から環へと移り変わって行くことは当然起り得ることである。ある発展段階では人類学的な解釈が有効なこともありうるし、次の段階では経済学的解釈が、そしてまた別の段階では社会学的な解釈が有効な場合もあるであろう。また他の段階では二つを併用することがより一層良好な結果をもたらす場合もあるであろう。而もこうした歴史の個性的な連鎖の環を貫串する、普遍妥当性のある法則性を見出して行くためには多元的な史観が必要であるし、それぞれの領域の専門家による学際的な協力も必要である。歴史の解釈においては多元的解釈に比べ、一元的解釈の方が一見理論的に優れているように見える。その一例をあげれば唯物史観—より正確に言えば社会諸現象の領域への唯物論の首尾一貫した適用と拡張—「人間の社会と歴史に適用された唯物論の諸原則の定式化」としての史的唯物論の立場をとれば経済学の展開した経済過程の解釈が、同時に歴史過程一般の基本的理解でもあるから。歴史の発展過程の解釈について一元論か二元論かという論争はマルクスとマックスウェーバーとを対比して日本の内外において戦後においても屢々論争されたところであるが最近の資本主義経済社会の恐慌を前にして今一度経済史的な立場からこれらの史観に触

れて見るのもあながち無意味ではないと思うので非才を顧みず簡単に触れて見ることにしたい。皆さんのご叱声を得ることが出来れば幸である。

唯物史観は人間社会の構造とその歴史的発展の一般法則についてのマルクス主義的学説であるがそれは既に19世紀中葉にマルクス・エンゲルスによってほぼ確立された一元的史観であり、その偉大な継承者であり実践者であるところのレーニンの言葉を引用すれば「マルクスは人類の三つの最先進国に属する19世紀の三大精神的潮流であるドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学及びフランスの革命的な諸学説一般と結びついたフランス社会主義の継承者であり天才的な完成者であった」と言っている。(注8) それは要約すれば次の如く言えるのではないか。人間社会とその歴史的発展は物質的生産を基礎とし、客観的法則性を持つ。人間は生活物資を生産する。この物質的生産は、一方では人間が自然に働きかけるといふ生産力と、他方では生産における人間と人間との関係という生産関係と、両者が統一されて成り立っている。両者の統一が生産様式でそれは社会の物質的基礎を形成している。各生産要式において生産関係全体を土台として、その上に政治的制度や精神的諸形態(イデオロギー)が上部構造として成立している。以上の構造をもつ社会はそれ自身の内的矛盾により歴史的に発展する。生産様式の内部で生産力は能動的要因である。それが発展してある段階にいたると既存の生産関係は狭いわくとなる。生産関係はより発展する生産力に照応するように変革されざるをえない。これに応じて、社会の上部構造も変化する。このように社会の歴史的発展が生ずる。人間社会の歴史には5つの基本的生産様式がある。原始共同体、奴隷制、封建制、資本主義、共産主義(社会主義はその第1段階)である。

これらの各構成体はおのおの固有の構成原理をもって生成、発展、消滅の過程をたどる歴史的に固有な諸段階をあらわしているが、また同時に歴史の一般法則は各構成体を貫くものとして見出されるのである。史的唯物論は「存在が意識を決定する」という唯物論的命題に即して、社会的意識は社会的存在によって規定される、という第1命題を出発点とする。社会の歴史はひとつの自然史的過程として、その合法則性の基礎は社会生活の物質諸条件のなかに探求されるが、史的唯物論がとらえるそれは生産様式である。社会発展の基礎は生産要式の発展であるというのが第2の命題である。生産様式は前にも述べた如く生産力と生産関係の両側面からなり、ひとつの社会の内部で生産力が発達すると、それに対応していた生産関係との間に桎梏を生じ、やがてその統一のために生産関係は変革される。この生産力と生産関係の矛盾と統一の法則が史的唯物論の第3命題である。

生産関係はその総体において社会の経済的構造を形造りこれが土台であって、その上に政治的法律的上部構造、社会的意識の諸形態が立ちその全体が社会構成体であることは前に述べた通りである。上部構造の性格は土台＝生産関係の性格に規定されるが、また上部構造は相対的独自性をもって土台に作用をおよぼす、この土台と上部構造の作用・反作用の法則が史的唯物論の第4命題である。ところで社会の土台＝生産関係は、なによりも生産手段の所有関係によって規定される階級関係である。したがって生産力と生産関係の矛盾は階級的矛盾という形をとって現われる。社会構成体の移行・交替は基本的には生産関係の変革であり、それはとりもなおさず階級関係の変革にほかならない。

史的唯物論はこのように階級斗争の必然に関する理論としてマルクス主義の核心をなしている。以上が唯物史観の骨格であるがこうした唯物史観(史的唯物論)に対する批判はこれまでしばしば多数の人によってなされているのでここではそのうちの二三のものに触れておこう。

一つは社会の歴史的な発展はマルクスの唯物史観に述べられている5段階の図式の通りには動いてはいないということである。それは社会の発展過程が自然的直線方向だけを辿るものではなくそれは必ずしも同一の形態をとるというわけではない。次にマルクス主義の発展段階の理論が一元的な決定論であり、且共産主義の世界をもって自己完結する体系のものでありそれは歴史の無限な発展ではなく、発展の終結を前提とした歴史観でありその意味で閉ざされた体系と言える。更にも一つは彼の史観の基礎に経済関係をおき生産力をもって社会発展の推進力と見なした点はある程度方法論としては正しいとしても逆に意識が存在を規定することもしばしばあり得るのであり、時には宗教が社会の最大関心たることもあり得るし更に政治が社会の指導的役割を果す時代もあり得るということである。

次にマルクスと対比して論ぜられているマックス・ウェーバーの二元論的史観について触れて見よう。それは彼の有名な「プロテスタンチズムの倫理と遺教主義の精神」の中からそれを汲みとることが出来るが彼は近代西洋における産業化を（合理的資本主義）という経済的行為の理念型概念に則して捉えているのであるがこの場合、彼はプロテスタンティズムという宗教を①合理的資本主義の上部構造ないしイデオロギーとして位置づけたり②合理的資本主義の歴史的誕生の第1原因とみなすことには極力反対する。産業化以前の社会の伝統主義を打破し生活態度を合理化しようとする動機と実践（職業倫理）は経済発展の担い手（経済主体）の主体的条件である。このようなエートスをもった経済主体が世界史上はじめて西欧の（中産階級）の中に発生したことの理由は、ウェーバーによれば（合理的予言に基づくカリスマ革命）としてのプロテスタンチズムの信仰、所は変わってもフランスにおけるカルヴィニズムの影響、特にこれらの宗教の世俗内禁欲的合理主義がこの社会層の（合理的な経済倫理）の形成を推進し事実上求められる。しかし彼は資本主義の初期においてその直接の推進力の役割をはたした宗教も、資本主義が発展の軌道にのった後にはその重要性は第二義的なものになったと受けとめている。結論を言えばウェーバーは宗教のみが資本主義のいくつかの構成要素の中でその発展の初期においては重要な構成要素としてプロテスタント的な禁欲主義的な厳しい職業倫理があったということを指摘しているのである。ウェーバーは最後に「われわれのめざすところは歴史における無数の個別的な要因から生まれた独自の「現世的」傾向をもった近代文化の発展が作りあげた網のなかで、宗教的要因が織りなした横糸を、ある程度まで明らかにすることのほかはないからである」と言っている。

- 注 1. 思想 岩波書店 1965, 8号
" 2. 思想 " " "
" 3. 「家族私有財産及び国家の起源」 岩波文庫 エンゲルス 西雅雄訳
" 4. 「歴史と体験」 林健太郎 文芸春秋社
" 5. 「文化問題の世界観的基礎」 田中耕太郎 現代知性全集
" 6. Civilization の意味で culture とは本質的に異なる
" 7. 世界の歴史 中央公論社
" 8. 「カール・マルクス」レーニン著、岩波文庫